

# 明治期におけるカトリック学校設立の動向(Ⅱ)

吉岡剛

はじめに

前稿追録

(Ⅰ)(Ⅱ) 教育を中心としたプロテスタントとの被認知状況比較  
愛良学舎

第二期以降の主たる動向<sup>①</sup>

第二期・第三期

第四期

むすび

はじめに

昭和四四年、筆者は同題の稿を起こして、その(Ⅰ)を発表した。<sup>②</sup>以来、時に続稿についての問い合わせがあったが、資料上の問題<sup>③</sup>と他への研究関心のため、心に残り乍ら放置したままであった。この間一四年、今、カトリック再布教後百年を越えて、歴史的関心が同教界に高まると共に、各地の教会史・学校史等が、客観的資料を含んだま

りあるものとして次第に出版されてきている。<sup>④</sup>これにはいう迄もなく一九六三年（昭和三八）をエポックとするローマ・カトリック教会の教会観・布教観の変革が影響している。たとえば、キリスト教内各宗派や仏教等異宗教とのエキュメニズムの方向がそれであり、その結果、教会内及び学校内資料への接近が一層可能となってきたと言える。そこには、貴重な、記録されたままの歴史的手がかりが、たとえば、ローマ教皇庁や、宣教師を送り出した修道会本部等において種々残されていると思われる。それらへの丹念な考証が進むにつれて、明治以後、我国のカトリック学校設立動向をまとめ始めた最初の試みと言える拙稿は、種々の点で改稿を求められることもあるであろう。事実、前稿の発表後、それに対する畏友・尾崎ムゲン氏の<sup>⑤</sup>示唆から得た別資料でここに補正を加える必要が既に有る。しかし、そうではあっても、いま一先ず、カトリック学校設立動向に一本の幹を通して試論とし、以後枝葉を伸ばしていくことにしたいと思う。それは、従来からキリスト教教育が我国教育に対しては無論、社会にも影響を与えていると認識され乍ら、それが主としてプロテスタントに関してであって、必らずしもキリスト教全体を取り上げていなかったことへの一つの補いとなると考えられるからである。

なお、前稿で予告した、明治期カトリックの教育意見に関しては、既に『明治教育世論の研究』（本山幸彦編、福村出版、一九七二）の上巻、「思想・言論・宗教界編」<sup>⑥</sup>の中で、プロテスタントのそれと併せて論及した。言うまでもなく、学校設立動向と教育世論は関連的に再考される必要がある。

ここで、本標題における全体構成を前稿に従って再録すると次のようになる。このうち第Ⅲ章迄を前回論述した。

# はじめに Ⅰ 布教の動向

- II 教育上から見た時期区分および前史
- III 第一期（明治初年——一八年）
- IV 第二期（明治一九年——二七年）
- V 第三期（明治二八年——三七七）
- VI 第四期（明治三八年——明治末年）
- むすび

## 前稿追録

### （I）教育を中心としたプロテスタントとの被認知状況比較

既に前稿「I、布教の動向」において、明治期におけるカトリック宣教活動の特徴を、プロテスタントとの対比を含んで述べたが、ここでは観点を変えて、その後の我国における実態及び影響関係から対比させておきたい。それは、たとえば我国近代教育の発展に関して、なぜプロテスタントだけが注目され、カトリックが無視されたのか、その理由を前稿に加えて幾分明らかにするからである。ちなみに、一九七二年（昭和四七）出版の四三六頁からなる大冊『近代日本の私学——その建設の人と理想——』<sup>⑧</sup>は、明治期に二三一頁を当て、プロテスタント系学校については都合四四頁をさいているが、カトリック系学校には結局六頁分当てただけであり、項を立てては、暁星学園、雙（双）葉学園、熊本信愛女学院のみを、それぞれ三頁、一〇行、五行のスペースで述べたにすぎない。

プロテスタントの場合には、

(1) 種々の点、たとえば歴史的に著名な学校が多い点で一般にも戦前から直ちに校名が挙げられる程に教育を展開していた。たとえば、同志社、立敎学院、明治学院、関西学院、神戸女学院、共立女学校、女子学院、東北学院、西南学院、梅花学院、フェリス女学院など……。これに対して、カトリックの上智学院、聖心女子学院は戦後に到る迄一般には余り知られないものであり、その他の暁星、双葉、信愛、白百合なども必らずしも著名ではなく、更に実際の校数も少なかった。

(2) この事は創立者の個人的名声にも関係し、プロテスタントの場合、教育界および社会で活躍した人物が多数輩出しているということでもある。たとえば、ざっと挙げて、新島襄、内村鑑三、津田梅子、石井十次、留岡幸助などを始め、敎本善治、沢山保羅、江原素六、押川方義、矢島樞子、津田梅子、安井哲子、羽仁もと子など、また外国人として我国の近代化に大きな影響を与えたフルベッキ、ヘボン、ブラウン、クラーク博士、ハウなどが上ってくる。これらは我国の教育史上無視できない人物であるが、これに比してカトリック界から個人名を挙げることは殆んど困難である。

(3) 更にプロテスタントの場合、それ自体の社会活動に注目されるものがあつた。たとえば、自由民権運動への参加と第一回総選挙(明治二二年)での信徒七名の当選、婦人矯風会の結成、「六合雑誌」の発刊、禁酒運動、廃娼運動、そして言う迄もなく、熊本・横浜・札幌バンドなどに結束した知識階級の信仰生活・布敎活動、中村正直、小崎弘道、植村正久、柏木義円、木下尚江、新渡辺稲造、矢内原忠雄などによる言論活動、そしてその他、島崎藤村、徳富露花など著名な作家達の文学活動など。これに対してカトリックではどうであつたろうか?

(4) プロテスタントの場合、現在迄に、前記人士の著作や伝記の他、独立した教育論・教育史など、研究書及び記録

等が既に一般向けに出版されている。たとえば、昭和一二年、平塚益徳によって『日本基督教主義教育文化史』<sup>⑨</sup>が出され、同三六年には基督教学校教育同盟による大部(四四七頁)の『日本におけるキリスト教学校教育の現状』<sup>⑩</sup>が、また五二年には同盟から『日本キリスト教教育史—人物篇—』<sup>⑪</sup>(四八〇頁)が公刊されている。一方、特に、武田清子による『日本プロテスタント人間形成論』<sup>⑫</sup>の編集は重要である。この事は、言い換えれば、信徒の中に教育研究に関する深い関心が有ったということである。この点、カトリックでは必ずしも十分ではない。

(5) 同様、布教史に関してもこの事が言える。つまり、プロテスタント側に総合的・体系的歴史記述の関心が強かったということであり、その為これ迄我国で出版された一般のキリスト教史は「キリスト教」という包括的名称を持ち乍ら、結果的には殆んどプロテスタント史のみを記述することが多かったのである。この点、カトリックにおいては、『カトリック大辞典』<sup>⑬</sup>や外人宣教師による次の著作の他、研究はないではないが、個別的・具体的研究に終っている傾向が有る。<sup>⑭</sup>なお、最近、たとえば昨五七年出版の福島恒雄『北海道キリスト教史』<sup>⑮</sup>などは、カトリックその他、広くキリスト教各派を含むようになって点注目される。

ヨハネス・ラウレン『日本カトリック教会史』 全二二頁、中央出版社、昭和三二年

J. Van Hecken; *Un Siècle de Vie Catholique au Japon*, (1859-1959). The Committee of the Apostolate, Tokyo 1960 (全285頁)

John Van Hoydonck (translated and revised); *The Catholic Church in Japan since 1859*, by J. Van Hecken. Herder Agency, Enderle Bookstore, Tokyo 1963 (全291頁)

James McElwain; *The Development of the Catholic Church (1868-1968) The Japan Christian Yearbook* Tokyo, 1968

以上のような理由によってこれ迄明確にはなっていないかった我国カトリック・ミッション・スクールは、実際にはどのような動向を持つものであったか？ また、カトリック教育は我国の教育及び社会に影響するところなかったのか？ それらを探求することは我国教育史・社会史に現在抜けおちている部分を埋めることになる。ちょうど同様の意味で現在高まりつつあるカトリック社会福祉事業史への研究関心とともに――。

## (II) 愛良学舎

既にことわったように、前稿「ビリオン塾」に対する補正をここで行なっておきたい。そのために、先ず前稿該当部分を再録しておこう。

宣教師立語学校として、他にビリオンの語学塾がある。ビリオンは五年、長崎から神戸に転じ、語学教授を行なった。内容と学生の詳細は不明だが、後年ビリオンが山口に移ったとき、そのときの生徒で田上という者が下関の警察署長になっているのに再会したという。<sup>④</sup>

なおビリオンは、一二年九月、仏語教授という名義で京都入りを許された。ただ、開塾は直ぐには認められず、翌年になった。京都にはかつて府立の語学校があり、その一科としてレオン・ジュリーが五年から七年末（経費の都合で仏語学校は廃校）まで教えたが、既に人数は英学生一五三人、独学生一三八人に比して少なく、七二人であった。

また、他に同志社英学校があり、仏語塾にどの程度学生が集まったかは不明だが、初級・中級に分け、かなり多忙をきわめたという。前者に初歩の文法を、後者にラ・フォンテーヌやラサールの詩を朗読させた。<sup>⑤</sup> 生徒にはジュリーに手ほどきを受けた稲畑勝太郎とか、後の山口県・大阪府知事、林市蔵、富井政章法博などがいた。ここで渋沢栄一も学んだという。<sup>⑥</sup> なお、ビリオンは原敬と師弟関係にあったとされるが、どこで教えたかは不明である。<sup>⑦</sup> その他ビリオンの伝記によると、伊藤博文、岩倉具視、大隈重

信、井上馨なども教え子だったという。この仏語塾は二年ビリオンが山口に転任するとともに消滅した。仏語への要求の減少と布教事業の拡張からであろう。

この論述中、後に得られた資料等<sup>④</sup>によって補正すべき問題点は次のようである。

- (1) ビリオンが長崎から神戸に移ったのは明治四年十一月二十四日であった。
- (2) 神戸のビリオン語学塾に「愛徳学舎」という名称が有った。
- (3) 一二年九月に入洛したが開塾は翌年になったという記述は誤まりで、むしろ開塾許可を得て一二年九月に入洛した。したがって、翌一〇月には直ちに開塾されている。ただし、開塾申請は既に一二年一月一日になされており、外国人宣教師が関係する教育機関を京都で開設することは非常に困難であったことに間違いはない。
- (4) 京都でのビリオン語学塾は「愛良学舎」と名づけられた。
- (5) ビリオン自身が創設者及び経営者ではなく、日本人との契約によって雇傭されたものである。
- (6) 「多忙をきわめた」ということには、以下詳述するように疑問が有る。
- (7) 二二年になされたと考えられた開塾は実は一九年七月三〇日である。

これらを具体的に正し乍ら以下に詳しくまとめてみたい。

なお、註記した「徳重文書」<sup>⑤</sup>は、徳重浅吉氏の手になる『京都府教育史上』<sup>⑥</sup>編纂の過程で京都府文書から整理筆写されたものであるが、重要な一つの文書において、原文日付に誤まりが有ったか、筆写過程で誤記が有ったか

め、関係文書目録の順序とその理解に狂いがあり、同書の記述にも若干の間違いが生じていると言える。その誤まりとは、後述の或文書が「一二年」とあるべきところを「一一年」としてあるため、愛良学舎の創立年が一二年ではなく一一年となっているということである。当時、外国人、特に宣教師の關係する学校開設に対して我國の警戒姿勢が強かったことを考慮したとしても、一一年一月申請、一二年九月許可では期間が長すぎると見て、徳重氏は一一年としたのであろう。しかし、他の文書の關係で検討すると、該文書の日付は一二年であるべきであり、開塾は事実として一二年であつたことに間違ひはない。なぜなら、そのような強い警戒のもとで許可した塾に対する視察調査の開始が、一年後の一二年一〇月をもって始まるということは全く有り得ないからである。カトリック側記録でもビリオンの入浴は一二年となっている。

さて、ビリオンは、明治四年十一月二十四日、長崎から神戸に転じ、語学塾「愛徳学舎」で仏語を教えた。その詳細は未だ不明であるが、クリシタン禁令の高札撤去（六年二月二十四日）後は布教につとめ、併せて、前稿で別記したように、孤児達の世話のため、フランスから女子修道会を招き、孤児院及び小学校を経営させた。しかし、彼の主たる関心と任務は布教にあり、しかも、それを行なうべき次の場合は、一一年末のプチジャン司教による指示もあつて、かつてクリシタン信仰の栄えた古都・京都であつた。つまり彼は、そこに、生きたクリシタンの発見か、あるいは少なくとも三百年前の信仰の影響を見ようとしていたし、他面、関連的に学習条件の利を見て仏教の理解を深めようとしていた。

したがって、彼は京都への転入を画策したが、高札撤廃後といえども、前稿でも触れたように、その処置自体は処罰しないというだけの変更であつたから、開港場神戸への場合と比して布教を目的とした古都入りの困難さは容易に



予測されるものであった。その場合とりうる唯一の良策は、当初の神戸においてと同様、語学教授を名目とすることであった。そこで彼は、神戸区役所書記として勤務中の京都府士族・野村成彦（神戸市宇治野町在住）の協力を求めたのである。当時、神戸の信者は増えつつあり、兵庫県庁内官員にも信者が出来ていたというが、野村が信者であつたかどうかは不明である。しかし野村は多分彼自身の親類であつた野村孝保の家を斡旋し、しかも彼自身の名前によつて、次のような一二年一月一日付の「外国教師雇入願」を出したのであつた。この彼の名による開塾申請は、恐らくビリオンの主導に協力する形においてなされたのであつて、彼自身が積極的に、たとえば利益を得んとするような意図において行なつたものではなかつたと思われる（後述「予算書」参照）。

#### 外国教師雇入願

- 一、正則仏語学校教師      仏国人    ア・ビリラン      当三四歳
- 一、給料    一ヶ月ニ付      金六〇円
- 但    生徒受業料及入舎金等ヲ以テ之レニ充ツ
- 一、雇期限      明治一二年二月一日ヨリ明治一五年一月三日マデ三ヶ年
- 一、結約所      神戸
- 一、住所      上京区第二四区天守町七八六    野村孝保邸内
- 一、舎名      愛良学舎

今般相願候私学へ私費ヲ以テ前文之教師雇入度候間御差支無之候ハ御許可相候様仕度 別紙条約書案相添奉願候也

京都府士族 上京区第二四区天守町 野村成彦

明治一二年一月一日

右之通申出候ニ付仍而奥印仕候也

戸長 武村市左衛門

区長 原田永慶

京都府知事 槇村正直殿

また、同日、同様にして野村とビリオン間で以下のような雇傭契約書がかわされ、証拠として提出された。ここに見る契約書の結構の完全さと、ひそかに伺える雇主への配慮の細やかさは、ビリオンのヨーロッパ的素養と彼からの協力への謝意を示したものと言つてよいだろう。しかも、これは、もともと入洛の為の形式にすぎなかった。

京都府上京第二四区天守町愛良学舎正則仏語学校教師トシテ貴下ヲ雇入ニ付左ノ条ヲ約ス

### 第一条

一、貴下ヲ京都府上京第二四区天守町七八六番地愛良学舎へ正則仏語学校教師トシテ明治一二年二月一日ヨリ同一五年一月三十一日マテ向三ヶ年ノ間相雇フヘシ

### 第二条

一、貴下へ雇中居宅一字無賃ニテ貸渡スヘシ破損等アル時ハ雇主ヨリ修理ヲ加フヘシ

但 食料 家具 奴僕及厩舎等ハ一切貴下ノ自費タルヘシ

### 第三条

一、貴下給料ハ一ヶ月ニ付日本金貨六〇円ト定メ毎月末ニ相渡スヘシ

但 時ニ因リ各種ノ貨幣ヲ渡ストキハ金貨ヲ元ニ立テ相渡スヘシ

### 第四条

一、諸規則授業時限及順序等ヲ定ムルノ權ハ其雇主ニ在ルヘシ 授業ハ月火水金土曜日ハ一二時間、木曜日ハ九時間トシ 暑中ハ並ニ九時間ト相定ムヘシ

### 第五条

一、貴下議スル所ノ事件ハ都テ決ヲ雇主ニ取ルヘシ

### 第六条

一、雇中一切商売ノ筋ニ関セサルヘシ

### 第七条

一、雇主ヨリ定ムル所ノ休日ノ外貴下随意ニ業ヲ廢スル時ハ其日数ノ給料ヲ引去ルヘシ

### 第八条

一、雇満期ノ後猶引続キ雇入ルノ時ハ期限以前ニ其事ヲ示スヘシ

### 第九条

一、期限内雇主不得已ノ事件有之雇ヲ止ムルトキハ其翌日ヨリ後三ヶ月分ノ給料相渡スヘシ

貴下不得已事件有之自ラ解約ヲ請フ時ハ其給料相渡ササルヘシ

但 雇主ヨリ雇ヲ止ムル時ハ期限前一ヶ月又ハ二ヶ月ナルトキハ其日数丈ケノ給料ヲ相渡スヘシ

第二〇条

一、期限内貴下無故約ヲ破レハ償金貳百円ヲ出スヘシ雇主無故雇ヲ解ク時ハ又償金貳百円ヲ出スヘシ

第二一条

一、貴下其職ニ任ヘサルカ或ハ懶惰過失等有之時ハ期限内ト雖モ雇ヲ止メ其翌日より給料渡ササルヘシ

第二二条

一、雇中貴下病ニ罹リ一ヶ月ヲ経テ猶愈ヘラサレハ此条約ヲ廢シ其翌日より給料相渡ササルヘシ

但 急病ノ病死或ハ变故等アル時ハ直ニ在留ノ領事ニ引渡シ其翌日より雇ヲ止メ給料相渡ササルヘシ

京都府士族 雇主 野村成彦

明治一二年一月

仏国人 ア・ビリラン 貴下

これに對して、ビリオンから承諾書が出される。

京都府上京第二四区天守町愛良学舎正則仏語学校教師トシテ御雇入ニ付テハ貴下ヨリ被相渡候条々ヲ承諾シ負任スル左ニ証ス

第一条

一、京都府上京第二四区天守町七八六番地愛良学舎へ正則仏語学校教師トシテ明治一二年二月一日ヨリ同一五年一月三一日マテ向  
三ヶ年ノ間生徒指導勉勵致スヘシ  
(以下 第二二条まで転写省略)

明治一二年一月

京都府士族 野村成彦 貴下

なお、「愛良学舎整則」は次のようであつた。

愛良学舎整則

第一条 本舎ハ野村成彦ノ創立ニシテ愛良学舎ト称シ正則仏語ヲ教授スルノ所ナリ

第二条 教師ハ外国人ヲ以テ之ニ充テ内国人ヲ以テ之ヲ補助ス 又教師ノ人員ハ生徒ノ増減ト學術進歩ノ度ニ因テ之ヲ増損スヘシ故ニ預メ之ヲ定メス

第三条 本舎ハ臣民諸族ヲ問ハス入舎又ハ通学セシムヘシ

但 生徒ノ人員ハ本舎ノ都合ニ依テ之ヲ決定ス

第四条 入舎ヲ請フ者ハ本地在籍者ノ保証印ヲ要スヘシ

但 通学生ハ此限ニ非ス

教則

第五条 学課ヲ分テ四級トシ修業ノ期ヲ定メス各自既ニ修ムル所ノ学力ノ浅深ト修業ノ進否トニ因リ等級ヲ定メ及期限ヲ伸縮ス

明治期におけるカトリック学校設立の動向(Ⅱ)

ルモノトス 其学科課程ハ教則表ニ詳ナリ

通則

第六條 修業月火水金土曜日ハ六時間 木曜日ハ三時間トシ暑中ハ並ニ二三時間トス 其期限ノ如キハ日ノ長短ニ由テ之を定メ

予メ揭示スヘシ

第七條 別ニ通學生ニ便ナラシメン為メ午後第二時ヨリ三時間同六時ヨリ三時間授業スルコトアルヘシ 其期限ヲ伸縮スルハ亦  
前条ノ如シ

第八條 休日ヲ定ムル次ノ如シ

孝明天皇祭 紀元節 春季皇靈祭 神武天皇祭 神嘗祭 秋季皇靈祭 天長節 新嘗祭 日曜日

一二月二五日ヨリ一月七日マテ

但 臨時休業ハ其時々揭示スヘシ

第九條 生徒ハ規則ヲ確守シ學業ヲ勵精シ温良貞靜ヲ主トシテ宜ク礼ヲ失スルナカルヘシ

第一〇條 教師ニ勤惰簿アリ生徒ニ出關簿アリ以テ其勉否ヲ記ス 勤惰簿ハ舍主之ヲ掌リ出關簿ハ幹事之ヲ主トスルモノトス

第一一條 教場ニ於テ殊ニ無益ノ爭論放恣ノ舉動ヲナシ或ハ雜話高声他人ノ業ヲ妨ケ若クハ舍内ノ樹木ヲ伐折シ又ハ危害ノ遊戲ヲ

ナス等ヲ許サス

第二二條 教場ハ靜肅ヲ要スルカ故ニ擊析ヲ聞テ出場スルニ緩急シ或ハ受業中漫ニ席ヲ離ル等ノ所為アル勿レ

第二三條 教場ハ必ス袴靴ヲ着クヘシ且敢テ新故善惡ヲ論セスト雖モ衣服ハ可成の清潔ニスヘシ

舍則

第四條 入舎生ハ通學生ト異ナリ専ラ學業ニ從事シ殊ニ風俗ヲ正シク威儀ヲ嚴ニシ言辭ヲ慎ミ苟モ學者タルニ耻ツヘキ行事ヲナスヘカラス

第五條 入舎生ハ尊卑ヲ問ハス學業ノ等級ニ從ヒ順序ヲ定メ等級同シキモノハ入舎ノ前後ニ因リ同時入舎スルモノハ長幼ヲ以テス且生徒ノ学力優等ニシテ品行方正ナル者ヲ選ヒ幹事トナシ之レカ監督タラシム

第六條 晨起擊柝ヲ聞カハ直ニ喝嗽ヲナシ舎中ヲ清掃シ又就褥ノ柝ヲ聞カハ寢褥ニ就クヘシ尚勉學スルモノハ嘿詭亡論トス

第七條 晨起後六時間ヲ正課トス 放課後雖散步時間ノ外ハ舎内ニ於テ各自研究スヘシ

第八條 疾病ニ罹ル者ハ醫師ノ診察ヲ受クヘシ

但 三日以上痊サルカ或ハ大患ノモノハ病院ニ入ラシムルカ若クハ退舎セシムヘシ

第九條 舎内ニ於テ飲酒シ許諾ナクシテ他ニ宿シ或ハ妄リニ異見ヲ吐キ幹事ヲ蔑視シ生徒相互ニ貨幣ヲ貸借スルヲ禁ス

第十條 舎門ノ開館ハ黎明黃昏トス 若シ外出セント欲セハ幹事ノ許諾ヲ受ケ必歸舎時限ヲ過クヘカラス

第十一條 舎内酒掃ノ整否ヨリ就褥後灯火火ヲ警戒シ或ハ犯則舎ヲ監視スル等幹事ノ責任ニ屬ス

## 學資

第十二條 學資ヲ二種トシ 一ハ入校ノ初メ一度限り出スモノ一ハ毎月二八日出スモノトス

第十三條 入校ノ初メ一度限り出スモノヲ二等ニ細別ス

一等 金五〇錢 二等 金三〇錢

第十四條 毎月二八日出スモノ亦二等ニ細別ス

一等 金五〇錢 二等 金三〇錢

第十五條 第六條ニ掲クル時間ヲ修業スルモノハ第二四條、第二五條一等ノ金額 第七條ニ掲クル三時ヲ限り修業スルモノハ第二

四条、第二十五条二等ノ金額ヲ払ハシム

第二十七条 二種ノ学資ハ都テ教則中ノ幾字ヲ兼ルモ重出ニ及ハス

第二十八条 第二十四条第二十五条ノ学資ハ日割ヲ以テセス

第二十九条 入舍生ノ食費ハ物価ノ昂低ニヨリ増損アリト雖モ大凡一日金二〇錢トス

但 被服褥具炭油学費等ハ自弁タルヘシ

教則表

		学 語		取 書		法 文	
第一級		第二級		第三級		第四級	
習 字	單語及連語前級ノ如シ精選ノ文章ヲ暗誦セシム作文前級ノ如シ	單語及通常會話ノ練習アルヘシ稗史小説ヲ暗誦シ且題ヲ設ケテ作文セシム	單語及通常會話ヲ練習スル事前級ノ如シ教師稗史及短キ小説ヲ講シ生徒ヲシテ又之ヲ口演セシメ且短易ノ會話文ヲ授ケテ之ヲ復書セシム	通常物石單語連語及通常會話ヲ教ウ、教師選集シタル單語適宜ノ連語及通常ノ會話ヲ以テ課トシ更ニ單語連語ヲ設ケテ之ヲ授ケ且前日ノ課程ヲ復習セシム発音ヲ明ニシ読声ヲ正スカ為メニ毎日元音ヲ練習セシム	課程中其一部ヲ綴字セシム	文章書ノ解部 文法規則及其使用 作文ヲ練習セシム	名詞形容詞動詞及副詞ノ變体ヲ口授シ且作文ノ法ヲ教ウ而テ教科書ヲ用ヒ次序ヲ逐テ之ヲ授ク
	前級ノ如シ	教師援抄セル文章ヲ讀ミ生徒ヲシテ石盤上ニ書取ラシム	單語及其他章中ヨリ撰集セル單語ヲ口綴(書テ綴ルニ非ス)セシム綴字書中ヨリ拔萃シテ毎日綴字科ヲ付与シ或ハ読本中ノ一部ヲ綴字セシム	語類ヲ區別シ且学力ニ依テ簡易ノ文章ヲ作り終ニ高尚文章ヲ作ルノ方ヲ口授ス			



課程ヲ定ムル本表ノ如シト雖トモ学力ノ進歩スルカ又ハ本人ノ望ニ因リ地理書歴史等ヲ教授スルコトアルヘシ  
語説ハ当分適宜ノ書籍ヲ用ユルモノトス

これらを見ると、ビリオンの教育意志に並々ならぬものが有ったように感じられるが、事實はむしろ、その奥に有る入浴への強い意図を見てとるべきであらう。後述するような以後の学校運営の現実がそれを裏付ける。つまり、結論的に言えば、カトリック学校設立動向の中には、特に宣教師個人がかかわった場合この形の一つの特徴としてあったと見てよい。これについては前稿の事例中にも若干同類例を挙げたところである。ちなみに今日にあって

も、語学教授は布教上一つの便宜的手段となっている。

ところで、この願はしかし直ぐには受け入れられなかった。そして更に下記のような予算書の提出が求められる。

#### 成彦私立愛良学舎

##### 会計予算

《私》

教師給料	四〇円
学舎管繕費	三円
諸雇給	一元五〇銭
諸機械費	五円
公費	四〇銭

計 四九円九〇銭

(受)

受業料 二〇円

食費ヨリ生スル純益 三〇円

計 五〇円

右差引純益 一〇銭

一、教師ノ給料ノ金貨六〇円則八七円ニ当ルト雖モ 前途定約ノ上追テ生徒充分ノ入舎アル迄ハ内一〇円ヨリ不少減給ヲナスヘシ  
其減法ハ大略受業料食費ヨリ生スル純益等ノ五分ノ四ヲ給スルモノトナス 故ニ今生徒ヲ仮ニ二〇名トナシ定額スル本条ノ如シ  
一、若シ非常ノ不足ヲ生セハ一ヶ月二円ノ予備金ヨリ之レヲ償フ  
一、最初ノ機械買入費ノ如キハ束脩二〇円ニ加フルニ四〇円ヲ予備金ノ内ヨリ操替支出スヘシ 右依御尋問上申候也

京都府士族 野村成彦

明治二二年三月一四日

榎村正直殿

これを受けた京都府監察掛の三月二六日付「取糺上伸書」によると、許可困難の理由は「永続方法及自然布教ニ関スル」ことへの懸念であったことが明白である。これに対してビリオン側は「神戸愛徳学舎生徒ノ内語学熱心ノ者ノ

ミ凡二〇名」を入舎させること、また教師給料は事情により減額しうることのような、教育及び経営上の融通性と可能性を強調して実現への意図を強く示す。同様、布教に関しては、一方でビリオンが宣教師であることを確認しつつ、しかし学舎内で布教させぬこと、したがって後日迷惑をかけることはないこと、また外宿を許さず、外部での布教にも機会を与えぬよう心がけることなどが述べられている。

#### 取組上伸書

過ル二二日已来野村成彦へ愛良学舎開業ニ付外国人雇入ノ儀兼テ其筋へ伺置シニ永統方法及自然布教ニ関スル義ハ無之ヤ一応取組スヘキ御達ニ付心得方可申出相達候処永統方法預算ハ別紙ノ通申出「ヒリヤン」雇入候上ハ神戸愛徳学舎生徒ノ内語学熱心ノ者ノミ凡二〇名ハ忽入舎ノ約定有之者月謝及舎費ニヨリ生スル利益ヲ基立トナシ万一不足アルモ教師給料四〇円迄ハ都合ニ依減給スヘキ内約有之旁不都合ハ生マシク旨申立候且又布教云々付而ハ「ヒリヤン」義モ格別信仰ニ付決而傍觀不相成義ハ素ヨリ懸念スル処ニ付雇入期限中学舎内ニ而布教ケ間敷義ハ致サセマシク旨是又内約置ト雖モ舎外ニ在テハ如何アルモ難側付「ヒリヤン」ノ意ニハ不叶ル由ナレ共達ヲ自宅内ニ寄留為致兎角他行ヲ予防スルニ不如ト心得外宿ヲ不許迄ニ注意罷在候付学舎内ニテ布教致サセ間敷ハ誓而上伸仕置後日御手数ヲ備ル義ハ決テ無之右等成彦ノ心得振御尋ニ付上伸スト雖トモ是非書面ヲ以テ上伸ヲ要スル義ナレハ当掛限ニテモ不善尋問書渡異度申出候付畢竟過日来相尋ルハ心得方ヲ承ル迄ニテ外国人等ニ関スル義モ無之尋問書無之ハ書面難差出程ノ義ニハ有之マシク旨弁解仕候得共仮令外国人へハ間接ノ義ト雖トモ成彦書面ヲ呈スル已上ハ布教ヲ制スルノ一端ニ備置度趣申立候付前条申立ニ相違ナクハ書面差出スニ不及旨申渡置候付此段上伸仕候也

監察掛

明治二十二年三月二六日

しかし、更になお許可はおりず、六月一六日、ビリオンは同様野村名儀であらためて次のように取運びの催促をしている。こうした手続の困難さから考えると、繰り返しになるが、神戸に在住し、かつ官員である野村には、自己經營の塾としては開塾を強力に進める程の意志はなく、ビリオンへの協力ということからであったと考えられる。この催促文によれば、一月一日以来「再応再々相伺候私学開業外国教師雇入之件」五月二六日付で外務及び文部両省間で協議を始めたとのことであるが、二〇日間を経て結論が出ないのはなぜか、と問い、更になお待たねばならぬとしても「ビリオン氏トハ本年二月一日ヨリ雇入之段条約取結候末ニ付頗彼カ自由ヲ妨ケ權利ヲ圧スルモノ不勘実ニ最初願出候ヨリハ殆ト百五十日相成如何ニモ困却仕候」と述べ、つけ加えて、次のように損害賠償の必要、「日本国之体面」とのかかわり、外国人の取扱問題等、事の重大性を訴えている。そして最後には、ビリオンよりフランス外交官を動かす可能性があることをほのめかして政府及び府庁の決断を求めている。

申出シ趣尚又外務省へ可申出方ニ候半年

(前略)然レバ迎今更無故解約スルハ仮令条約草案ノ如ク履行セサルニモセヨ多少其損害相償ハサルヲ不得且第一日本国之体面ニモ関シ不都合ト存候素ヨリ政府ノ御詮議中ナル以上ハ謹テ他日可否御明令アルヲ待ツヘキノミニシテ彼是苦情可相鳴筋ニ付該学舎ノ如ク則文部省制定学制ニ依テ願出候上ハ他日学科御改正之節如何ノ御達アルモ素ヨリ其分ニ有之只各地ニアル学舎ハ未タ不被差停ニ成彦私立舎ニ限り独本意ヲ遂クル不能ハ開舎ト不開舎ノ別アリト雖モ權衡其平ヲ不得様被存候条尚御詮議之末何分之御指揮被下度右ハ教師ア・ビリオン氏ヨリ彼国駐劄全權公使ヲ以テ政府ニ御照会致シ候趣ニ付旁成彦へハ算モ有之至急御指揮相願候也

京都府士族

上京区第二四天守町

当時兵庫縣神戸区神戸浜宇治野町寄留

野村成彦

明治二十二年六月一六日

京都府知事 槇村正直殿

なお、別の文書によれば（後述、明治一三年七月九日付）、七月七日付で府が「一応探索之上可否之見込ヲモ相副差来候処」を外務省に照会したことがわかる。

このようにして、八月一二日、あらためて次の確認書が出される。

本年一月二一日附開業相願候成彦私立愛良学舎立舎之本意再応御尋問趣致拝承候 右ハ最初出願之書面及爾後口頭ヲ以テ開陳仕候通素来該舎ハ正則仏語学ヲ教授スルノ所ニシテ毫モ耶蘇宣教等ニ関渉不致候此段上申候也

京都府士族 上京区第二四組天守町

野村成彦

明治二十二年八月一二日

京都府知事 槇村正直殿

これは次のような経緯によつて監察掛から求められたものであることがわかる。

本書当府士族野村成彦仏人ア・ビリヲン雇入出願之儀取調方御指令ニ依リ総書類ヲ一閱シ其要点タル処ヲ考按スルニ外務省往第一二号同一四号書記官ヨリ兩度ノ照会ニテ探索書ノ趣意ヲ詳細取調セヨトアルニ止レリ而シテ右探索書ノ趣意タルヤ学舎永統方法及ヒ布教云々ノ二事ニ大別スルモ已ニ前日喚問ノ際永統方法ハ予算ヲ以テ答弁書差出スモ只布教云々ハ口頭ヲ以テ応答申出ルモ書面差出ササルニ依リ今日更ニ問フ処ノモノハ独リ布教云々ノ一事ニ止リテ永統方法ハ今之ヲ問フモ當ニ無益ノ事ト思考ス依テ昨一日布教云々ノ儀ニ付心得方及喚問タルニ前日口頭ヲ以テ申立テシ通彼我ノ弁利上ヨリ雇入約定相結ヒ仏語学ヲ教授スルヲ立舎ノ目的ニ有之故ニ学舎内ニテ布教ケ間敷儀ハ致サセス心得ナレトモ元来ア・ビリヲンノ人タルヤ宣教師タルモノニ付自分ニ於テモ聊掛念スル処アルニ依リ開舎ノ上ハ舎内ニ寄留致サセ是等予防致度心ニ有之旨則別紙○印書面差出候依而此段一応上申仕候也

監察掛

明治一二年八月一二日

なお、これには次のような追記があり、そこに愈々最後の要請が示されていたことが伺われる。

追テ本文出願後已ニ半歳余ニ及ヒ多少ノ費金有之迷惑罷仕候儀ニ付尚此後多クノ時日ヲ費ササレハ御指令難相成儀ナレハ一ト先解約致度ト心得居候旨口頭ヲ以テ申出ル処右ハ事情尤ニ相聞候ニ付一応此旨長官迄上申致スヘク分ニ聞置候旨申達置候依テ此段添申候也

こうして漸やく九月一日、外務省より許可が下された旨連絡が府庁から有り、一方、文部省から京都入りのビリオ

ンに対する旅行免状が八日付で出された。<sup>⑤</sup>

書面願之趣仏国人ア・ビリヲン雇入中 上京区第二四組天守町七八六番地雇主宅へ僑居為致候儀聞届候旨外務省ヨリ指令有之候  
条此旨相達候事

但 京都府下ヨリ神戸港マテ通行免状並僑居免状各一葉下渡候事

明治一二年九月一日

そして、漸やく九月二九日、ビリオンが愛良学舎に赴任したことが同日付で届出される。また併せて、愛良学舎開  
業予定日を一〇月一〇日とした旨京都府学務課宛下記のように開陳される。

成彦私傭仏国人ア・ビリヲン氏本日赴任候ニ付サキニ御允裁相成候通上京区第二四組天守町愛良学舎内へ僑寓為致候仍テ此条及  
御届候也

野村成彦

明治一二年九月二九日

右之通申出候ニ付依而奥印仕候也

戸長 伊東吉治

京都府知事 植村正直殿

成彦私立愛良學舎開業期日ノ儀ニ付御照聞之趣了承右へ學舎修繕之都合ニ依り來一〇月一〇日開業式執行之心算ニ有之候仍テ此  
条及開陳候也

明治一二年九月二十九日

京都府士族 野村成彦

京都府學務課 御中

なお、翌三〇日には願書の一部訂正と問い合わせが下記のように行なわれ、學生対象の範圍拡大の意図が示されるが、直ちに許可を見ている。

本年一月一日附願出這回御裁可相成候外國教師雇入願狀中ア・ビリオン年齢三四歳トアルヲ三七歳ト 条約案中第四条月火水  
金土曜日ハ一二時間トセシヲ六時間ト木曜日ハ九時間トシ暑中ハ並ニ九時間トアルヲ共ニ三時間ト正誤仕度仍テ此段相願候也

野村成彦

明治一二年九月三〇日

京都府知事 榎村正直殿代理

京都府大書記官 国重正文殿

成彦愛良學舎開業



御允可ニ付左之件々相伺候

一、小学校令中小学科未卒業之者へ教授不相成ハ亡論ニ候得共若シ小学科受業之者ニシテ時間外通学依頼候節ハ授業不苦候哉

一、管外学齡之者寄留中授業候儀ハ不苦候哉

一、本学生御進退之都度学務課へ可致御届ハ何等ノ主義ニ有之哉且普通私学ハ渾テ可届出筋ニ候哉

一、教師就職中無拠據事故有之最寄開港場へ往復候節ハ外国人各地旅行心得第二項ニ拠リ御府へ御添書可願出筈ニ候処若シ成彦不在中右等之場合ニ於テハ部理代理人相定メ置同人ヨリ臨時出願為致不苦候哉

右至急何分之御指導有之度候也

明治一二年九月三〇日

京都府士族 野村成彦

右之通申出候ニ付依而奥事仕候也

戸長 伊藤吉治

京都府知事 榎村正直殿代理

京都府大書記官 国重正文殿

第一・二条伺之通

第三条進退届出之儀ハ府下取締上ニ付入用有之外国人雇入之私学ニ不限候事

明治期におけるカトリック学校設立の動向(Ⅱ)

第四条雇主管外旅行之節者其都度届置其不在中代理ニテ不苦候事

ところで、愛良学舎は開業後直ちに其月より毎月一度視察を受けることとなった。そこには政府側の外国人経営学校に対する警戒心が如実に見えており、事実、更にビリオンの行動に関して警察からの監視も厳しかったようである。これら府による厳しい視察の記録は二年一〇月に始まり、途中一四年六月より一〇月の間を欠いて、一四年一月三〇日迄しか残されていない。しかし学舎そのものは存続し、遂に閉塾に到ったのは明治一九年七月三〇日付であつた。一九年八月一日の『日出新聞』は、下記のように、下京区役所に廃舎届けが出されたことを報じている。閉塾理由はビリオンの雇期が満ちたためとされている。

・学舎廃業 下京十式組柳馬場高辻下の中村亀造氏が發起にて下京四組三条通高倉西入る二十番戸深堀政吉宅へ私立愛良学舎といふを設け仏国人ア・ビリン氏(マツ)を雇入天主教の講義をなし居しが今度雇期の満たるゆえビリン氏を解雇し一昨日限り愛良学舎を廃したる旨同日下京区役所を経て京都府へ届出たり

なお、同記事は「天主教の講義をなし居りし」としている点、恐らく一四年一二月以後はキリスト教監視の姿勢が弱まっていたのであろう。『明治文化史』六、宗教編によれば、明治一五年以後「政府は明治初期に比べると極めて放任主義的であつて」「宗教に関して解放的となつてゐる」とされる状況があつた。そして殊に京都では、一三年夏、府知事が榎村正直から北垣国道に交代することによって布教の緩和が見られたからである。この結果、ビリオ

ンは京都問屋町五条下る東側の大仏寺附近の民家に塾舎とは別に住居、つまりは教会を設けたのであった。なお、廃舎時の愛良学舎所在地は、『河原町カトリック教会 百年の歩み』が一五年三月に「仮聖堂とした」という「三条通り河原町よりそんなに離れていない場所、高倉通りであったと思われる」とほぼ一致するものである。同書は更に「この仮聖堂には『天主公教会』の門標を掲げ、明治天皇の御還幸の時には表にきれいな装飾をした事もあるようである」と書く。なお、三条河原町に進出後も同土地は所有されており、明治二四年五月一日、教徒有志による貧民小学校が建てられている。

さて、このようにして開かれた愛良学舎はどのような学校であったか？ 一〇月の第一回「視察之記」は次のように記録している（抜萃）。

- 一、愛良学舎ハ上京区第二四組天守町ノ東側ニ在リ 屋宅俱ニ狹隘ニシテ塾舎ノ体裁ヲ成シタル者ニ非ス
- 二、教場僅ニ一ヶ所書籍器械未タ備ラス
- 三、生徒未タ多ク集ラス通学ノ者僅ニ三名アリト云
- 七、課業ハ先ツ仏語ヲ授ク尤生徒ノ好ニ応シ法律其他ノ学ヲモ授クヘシト云フ（毎日裁判所ニ来リテ法律書ヲ講スルベネモ其親友ナリト云）
- 一一、小棲アリ教師ノ居室トス教師延テ其室ニ至ル几案等皆未タ整ハス椅子ヲ吾曹ニ譲リ自ラ空函ニ踞ス其樸素ニシテ修飾セサル概ネ此ノ如シ

また教授方法は第二回「視察之記」（明治一二年一月）によれば「授業ハ専ラ口授ヲ用ヒ或ハ塗板ニ其授ケント

スル所ノ文字ヲ記シ生徒ヲシテ之ヲ書取ラシメ別ニ書籍ヲ用ヒス」というものであり、その他若干を拾いあげると、

其授業ヲ観ルニ会話書ヲ用ヒ教師ハ日本語ヲ以テ問ヲ起シ生徒ハ之ニ答フルニ仏語ヲ以テシ或ハ教師仏語ヲ以テシ生徒日本語ヲ以テ之ヲ訳ス 宇多田ハ独リ日本外史ヲ仏語ニ翻訳シ之ヲ教師ニ質ス 教師日本語ヲ以テ其文法ヲ説明ス懇到頗ル至レリ (第三回「視察之記」明治一三年一月)

受業生徒ノ中四名ハ我邦ノ仮名字ヲ以テ仏語ノ單語ヲ記列セシモノモ暗誦セリ其故ヲ問ヘハ教師曰ク此生徒ハ尚ホ初学ナレハ原語ノ文字ヲ以テ暗記セシムルヨリ先ツ日本ノ文字ヲ以テ綴リタル原語ヲ授クレハ大ニ便ナルニ因リテ此ノ如クスト (第五回「視察之記」明治一三年三月)

一名ノ生員ヲ呼ヒ読本ヲ暗誦セシメ次ニ又他ノ生徒ヲ呼ヒ逐次ニ暗誦セシムルニ四名中一名一二ノ遺忘スル処アリ 教師其一名ヲ督責シ曰ク、君ハ前日ノ復習ヲ惰レバナリ 次回ノ巡視アルノ日ハ必ス今日ノ如ク課業上ニ遺忘ナキヲ欲シ一層ノ勉強アルヘシト、蓋シ其意視察アルヲ以テ生員ヲ奨励スルナルヘシ (第一二回「視察之記」明治一三年一月)

各日ノ授業時間ヲ問フニ教師曰ク此節ハ午前第九時ヨリ第一〇時迄ハ読本ノ暗記ヲナサシメ 第一〇時ヨリ第一一時迄ハ「ボンテーン」ノ詩ヲ誦読セシメ 第一一時ヨリ第一二時迄ハ読本中ニ就ヒテ文法ヲ教授シ 午後ハ会話ヲナサシメ或ハ既ニ暗記セシ詞ヲ以テ作文ヲナサシメ或ハ新鏡草ト名クル日本小説文ヲ仏語ニ翻訳セシムルナリト 而シテ其翻訳セシモノ一冊ヲ一見セシム

教師 林昌信ナル生徒ヲ塗板下ニ呼ンデ読本中ノ一章ヲ暗誦セシメ該章ニ存スル動詞ノ二三語ヲ抜き其人稱語尾ノ変化等ヲ塗板ニ書セシメ 次ニ広瀬末吉 宮川慶応ナル二名ノ生徒ヲ起立セシメ又読本中親子ト題スル一章ノ各句ヲ先ツ交互ニ暗誦セシメ其意

義ヲ講セシムルニ皆能ク其義ヲ弁解ス（第一六回「視察之記」明治一四年三月）

教場ノ体裁ヲ監視スルニ徹々粗陋ニシテ漸ク三人ヲ容ルルノ「テール」四脚ヲ設ケ四壁ニ其大サ全面僅カニ尺斗ノ掛図 植物軍艦蒸氣船器械 五大洲之人物等ノ図ト塗板トヲ掲クルノミ 九時一〇分教師ア・ビリヤン氏生徒五名ヲ携エ来リ直ニ初等生徒（一名ハ九年、一名ハ八年）二名ニ洋学ノ習字ヲ授ケ次ニ語学ヲ授ケナガラ外三名ノ生徒ニ語学ヲ授クルコト二時間ニテ終ル、此間質問 講義 訳解 書取等授業ノ体裁前同上申ニ異ナルコトナシ（第一八回「視察之記」明治一四年五月）

明治一四年一月三〇日 学務課員為視察愛良学舎教場ニ至ル生徒四名齡纔ニ一二・三、三名ハ仏国文典及ヒ文法上ノ解部或ヒハ組立法ヲ学ヒ一名ハ習字ヲ為ス須臾クシテ備教師仏人ビリヤン生徒ニ令シテ曰、此ヨリ動詞ノ変化及ヒ暗誦ニカカルヘシト乃チ原書ソノメールノ文典ニ就キ不規則動詞ノ変化作用ヲ教ヘ及ヒラ・フォンテースノ歌書ニ就キ 二・三首ツツ交ハル々暗誦セシム該舎生徒ノ員數ハ客月ト異ナラス 且本月上旬以來教師ビリヤン病ニ罹ルヲ以テ四・五日間其友人仏蘭西人ヲリヤンニ囑託シテ授業セシム、教場ノ如キハ稍ヤク疊五・六帖ヲ敷クニ足ル民屋ノ小樓ヲ借り受ケ正課三時間ニ仏語学ヲ目的トシテ教授スルモノナレハ要スルニ現今ハ仍ホ別ニ掲載スヘキ程ナル狀況ナシ（「愛良学舎之部」明治一四年一月）

このように学舎は設備整わず学生数もごく少なかったから、野村に代る留守役・山田斎治は第一回視察の学務課員に対して「此舎矮陋以テ四方ノ学士ヲ待ツニ足ラス行々將サニ更ニ宏壮ノ居ヲトセントス」と述べている。同様、第三回視察の際も「該舎ハ何分狹隘ナルヲ以テ生徒ノ入舎スヘキ室ナク其勉学ニ不便ナレハ尚ホ生員ノ増加スルコトアラハ適宜ノ寺院ヲ借り生員ヲ入舎セシメント欲ス」と計画が語られるが、後述するような現実の学生数で、その必要はその後とも余り出ていない。

警戒した注意人物、宣教師・ビリオンについては視察記はどのように捉えているだろうか？

六、教師ア・ビリランハ能ク邦語ニ通ス明治二年ヨリ本邦ニ来寓セリト云

八、ア・ビリラン曰余ハ此地ニ来リテハ唯学ヲ授クル已而決シテ教ヲ説クコトヲ為サス 但生徒ヲ授業スルノ外余ハ更ニ亞細亞古

代ノ事ヲ研究スルノ任アリ日々汲々從事セリ因テ生徒少シト雖モ決シテ無事ニ苦ム事アラサルナリト

九、又曰日本ノ上古ヲ稽ルハ仏書ニ依ラサルヲ得スト其訳スル所ノ写本数巻ヲ示シ又印本ノあつ免艸ト題シタル仏訳ノ書ヲ示ス

一〇、又曰余カ古代ノ事ヲ研究スルノ志ハ適々一昨年来航シタルギメー氏ノ志ト同一ナリ、ギメー氏ハ元ト余ト同ク里昂ノ小

学校ニ学ヒシ旧友ナリト（本府ノ仏国留学生ヲ担任教養シ居ルジュリー氏モ亦此親友ナリト云）

（第一回「視察之記」明治一二年一〇月）

これらから、後にも述べるようなビリオンの姿勢とその仏教に対する研究意欲が推測できる。もっとも、仏語学習の意欲を持って入舎した青少年に対しては教育指導上の努力と配慮を怠らなかつたことは前記「視察之記」を通して判断できる。更に付記すれば第八回報告（明治一三年六月）においては「生徒ヲ遇スル頗ル温和ニシテ懇切ナルヲ覺フ」と記されている。しかし、生徒は充分には集らなかつた。視察報告を見ると、開塾当初の一二年一〇月には通学生二、三名にすぎず、一月で四名、一二月八名、一三年一月六名、六月八名、一四年三月五名という有様であつた。しかも、前記のように、そのうち二名は九歳と八歳の子どもであつたという報告や、全「生徒四名齡纔ニ一二・三」という記述もある。しかし、これらは偶々行なわれた視察時間帯の関係であるかもしれない。なぜなら、在籍八名とした第八回報告（明治一三年六月）において「其内小学教授ニ関スル人アリ或ハ公務ニ関スルアリ、午前ニ来ル

者午後ニ来ル者早キアリ晩キアリ。是ヲ以教授時間ヲ一定スルヲ得ス」としているからである。事実、生徒の一人・久留米藩士・中野好太郎は元警官であったという。第三回報告（明治一三年一月）では「小学ニ在職ノ者」「本月ニ至リテハ其出席僅ニ二・三回ノミト云フ」としている。またしたがってこれら在職者の一日当り時間数は少なく「授業ハ現今唯日々午後三時間ノミヲ用フ」という報告（第一回、明治一二年一〇月）もある。

しかし、これら生徒達の会話や対訳の伸達は目ざましく、岡山県士族の高戸、山口県士族・宇多田、出身不詳の広瀬末吉、宮川慶応、兵庫県在住信者の息子・古林昌信<sup>⑤</sup>などは視察記の中でも注目されている。たとえば既述の宇多田の仏訳日本外史（第三回）については、更に第五回報告（一三年三月）で「教師カ常ニ編纂セント欲スル所ノ日本歴史ノ一助ニ供スヘシト云フ」程であった。また「常ニ出席スル者五名」（第一六回、一四年三月）の中の三名、広瀬・宮川・古林は「余ト日夜同居スルニ因リ会話ハ殊ニ巧ナリ」（同上）とビリオンに評価されていた。

なお、この学生数の少なさをビリオンは必らずしも気にするものではなかった。ただ一度だけ第九回（明治一三年七月）に「自今復舎中ヘ生徒ノ止宿スヘキ方法ヲ設ケバ入学生員更ニ増加スヘキコトモアラン」と語り、また、第五回（同三月）に、「此頃余ノ良友ジュリー氏ノ通信アリ京都府ヨリ本国（筆者註、フランス）ヘ遊学生員ノ學術進歩ノ景況ヲ記シタル書ヲ得タレハ之ヲ日本語ニ翻訳シ西京新聞等ニ載セ広ク日本ノ学生ニ示シ其勸奨ニ供セハ聊カ補益スル所アランコトヲ想像ス」と述べ、更に、第八回（同六月）に「サキニ余カ同国ノ友『ジュリー氏』京都府ヨリ本国ヘ遊学セル生徒進歩ノ景況ヲ示シ併テ余ニ次テ仏国ニ遊学スヘキ生徒ヲ養成センコトヲ企望スト通信セリ」と、愛良学舎の社会的意義を訴えている。また、ビリオンは続けて「如何セン余カ生徒僅少ニシテ彼カ望ヲ飽カシムル能ハサルナリ」と述べ、視察者によれば「頗ル生徒ノ稀少ナルヲ歎スルモノノ如」く見えたという。

しかし、彼はもともと語学教授を主たる目的として入洛したのではなかったから、特に増員のために募集の画策をするでもなく、下記のように自ら関心のあった仏教研究に困難の中で勤しみながら、ひそかに学生達の中から信仰に関心を持ち信者となる者が出現することを期待し、更に広く布教の自由な機会が与えられるのを待ったのであった。

生員ノ増減授業ノ時間暑中休業以前ニ等シク一ツモ増減スルコトナク 授業時間ハ現今午前七時ヨリ始メテ正午一二時ニ終ルト其所以ヲ問フニ教師曰ク余ノ兼テ熱心従事セル日本仏学ノ研究ニ於テ此頃一難事アリテ頗ル時間ヲ要スレハナリ 其事由タルヤ余カ日本仏氏ノ沿革ニ関スルノ説明ヲ請ハント欲スル京都諸宗ノ寺院此頃ニ到リ概ネ余ニ面接スルコトヲ忌ミ、拒絶スルニ至レトモ務メテ東西ニ奔走シ 彼是有学ノ僧侶ヲ訪フニ在レハナリ 然レトモ来ル明治一四年六月ニ至レハ仏国全權公使ノ神戸港ニ来ルノ期アルヲ以テ該公使ニ頼リ余カ素志ノ成果ヲ扶助センコトヲ請ハントスト（第二回「視察之記」明治一三年一月 拔萃）

余年来日本仏氏ノ歴史ヲ研究セシニ此比至極ノ良師ト良書ヲ得、授業ノ予科日々研究セリト、問フ其師ハ何人ナリヤ曰府下聖光寺ノ僧某ナリ 問其書ハ何ナリヤ教師直ニ起チ側ナル卓上ヨリ二小冊子ヲ持来リ是ナリト云フ取テ之ヲ視レハ一ハ日本古代各宗派ノ歴史ナリ一ハ教師自ラ欧文ヲ以テ該書ヲ訳スルモノナリ 教師曰余全ク此書ノ翻訳ヲ終フルハ今ヨリ三・四年ノ業ナリ 然シテ該書中意義解シ難キトコロ多キニ苦シムモ師某ニ質問スルヲ得テ甚便ナリ 該師ハ博学多識ニシテ且懇切ナリ、余カ多年ノ志望ヲ達シ畢生ノ榮ヲ得タリ何ノ幸カ之ニ如ント喜色顔ニ溢レタリ 実ニ宗教ニ熱心スル想フヘキナリ（第八回「視察之記」明治一三年六月）

なお『河原町カトリック教会 百年の歩み』によれば、既に、監視下の一三年二月に愛良学舎の同所で洗礼が学



生・古林正信<sup>④</sup>と織物工・中村亀藏<sup>⑤</sup>（後述）に対して授けられている。そうした布教活動のために、したがって府外地への出張を含めて休業も多かった。第一三回「視察之記」（明治十三年一月）は「本月二十七日午後一時至ル校番出迎ス問フ授業アリヤ曰四・五日前休業セリト、問フ教師ハ如何スルヤ曰教師ハ他出セリト」と、クリスマス期の状況を語る。同様、後述する清水への転居をはさむ一ヶ月の休業は、塾ないしは教育経営としては余りにも長すぎよう。第一二回「視察之記」（一三年一月）は次のように書く。

問フ現今生員學術進歩ノ景況如何ト教師曰ク去月ヨリ該舎転移ノ混雜中ニテ生員ノ休業スルノ日凡ソ一ヶ月余ニ及ヒ去ル二五日ヨリ起業（後略）

ところで、上記新聞記事や巡回記録に見るように、愛良学舎の経営者は、当初の野村成彦から矢継ぎ早やに他へ変更を見ている。たとえば、明治十三年五月の第七回視察記によれば、ビリオンから「野村成彦ノ都合ニヨリ」変更の可能性があることが伝えられ、七月二日付で下記の書類が出された。つまり当初の契約書の一五年一月三十一日という三年契約はその満期以前に破棄されたのである。

#### 外国教師雇入願

一、正則仏語学教師

仏国人 ア・ビリオン 当三八歳

一、給料 一ヶ月

金六〇円

一、雇期限 明治一三年八月一日ヨリ明治一六年七月三十一日 三ケ年

一、結約所 京都

一、住所 上京区第二四組天守町七八六 野村孝保邸内

一、舎名 愛良学舎

今般及開申候私立学校私費ヲ以テ前文之教師雇入度候間御差支無之候ハ御許可相成候様仕度 別紙条約書案相添奉願候也

大分県平民

上京区第二四組天守町七八六寄留

高倉 愿

明治一三年七月二日

前書通申出候ニ付依テ奥印仕候也

上京区第二四組 戸長兼学務委員 伊東吉作

京都府知事 榎村正直殿

理由は第一〇回「視察之記」によれば、野村成彦の破産のためとされている

教師曰ク当舎ノ所有者野村成彦此節破産ノ不幸ヲ醸シ当舎ヲ売却スルニ因リテ余ハ他ニ於テ更ニ一屋ヲ借ラント欲ス 生徒ノ来舎ニ便利ナル地位ヲ求ムル為メニ即今府街ノ中央ニテ三条或ハ四条通ニ一ノ借家ヲ搜索セリト

ビリオンにとっては、入洛開塾の本来の意図から言つて、その変更は単に形式的なことにすぎなかつたであらう。

「幸ニ他ニ又雇入希望ノ人アルニヨリ近日雇主変易スヘシ 尤モ教則等ハ従前ノ通ニテ変スルコトナキヲ欲シ即今其協議中ナリ」とする第七回視察記（一三年五月）、および、「他人代リテ雇入ルルコト既ニ決議シタリ、近日府庁ニ出願スヘキ手続ナリ」とする第八回視察記（同六月）の内容からそのことは容易に推測される。そして、むしろ、新たな布教の出發が意図されていたのではなかつたか？ こうして、一方で一〇月、問屋町五条下ルに借家し、そこで洗礼を授けている。また、伝記によれば、一四年、大仏寺附近問屋町正面に、更に一五年、千本中立売上ルに布教所を設けている。

なお、前記高倉憲の願に対して、七月九日付で府から外務省に下記のように届がられ、七月一六日に外務卿井上馨からの許可が届いた。そしてその旨同月二六日、新経営者高倉に伝達されている。

#### 簿二八〇号

大分県平民高倉憲外国人雇入之義ニ付伺

大分県平民高倉憲ヨリ愛良学舎へ仏国人ア・ビリオン雇入之義別紙之通願出候間可然御詮儀相成度此段相伺候也

附 従来外国人雇入之節ハ一応探索之上可否之見込ヲモ相副差来候処昨一二年七月七日付ヲ以御省書記官へ照会之次第モ有之候付可否之詮議ニ不及其儘添書候間此段申添候也

京都府知事 榎村正直代理

京都府大書記官 国重正文

明治一三年七月九日

外務卿 井上 馨殿

書面 高倉愿雇仏国人ア・ピリラン雇入中 上京区第二四組天守町七八六番地野村孝保邸内雇主於テ借受僑居為致候儀聞届候旨  
外務省ヨリ指令有之候条此旨相違候事

但 京都府下ヨリ神戸港マテ往復免状并僑居免状各莖葉相渡候事

明治一三年七月二六日

ここに見るように、学舎の所在地・教則等には変化がなく「自今復舎中へ生徒ノ止宿スヘキ方法ヲ設ケバ入学生員更ニ増加スヘキコトモアラント」と、寄宿を具体化した他は、経営者のみが変わったことになる。なお、高倉の詳細については不明であり、彼は同所に寄留している。しかし、一三年一月二五日には、舎主は変らないが前述のように、学舎を清水坂の中村健次郎邸内に移した。これは恐らく最初の信者であった中村亀蔵の斡旋に依ったものである。第一二回視察記（一三年一月）は次のように言う。

該舎ハ本月二五日 下京区第二二組清水坂二丁目二〇六番地中村健次郎邸内ニ転移スルニ因リ同邸ニ至ルニ教師出迎ヒ教場ニ導キ曰ク 該屋ハ四方ノ眺望ハ頗ル広濶ニシテ空氣ノ流通最モ能ク学生ノ健全ニハ殊ニ適宜ナリト雖モ 地位遠僻ニシテ生徒ノ往還ニ最モ便ナラス 前回視察ノ時陳述スルカ如ク余ノ本意ニ適セサレハ即今尚ホ四条近傍ニ於テ四方ニ便ナル一屋ヲ借ラントヲ望ミ雇主高倉愿ヲシテ専ラ其搜索ニ従事セシムト

一方、問屋町正面の教会は間もなく近隣の人達の偏見から批判を受けることとなり、一五年一月乃至三月、信者達の努力によって三条高倉の土地を得る。その経過の中で学舎自体の動向はブツンと切れるが、前述の『日出新聞』記事から判断すれば、一六年七月三十一日の契約切れ後、恐らく、同じく三年契約を最初の信者の一人中村亀蔵（下京区一組柳馬場高辻下の在住）とかわしたのであろう。そして、上記三条高倉西入ル二〇番深堀政吉名儀宅へ転じたものと考えられる。但し、政吉は明治一三年から一六年迄神戸教会伝道士として播磨地方で活動しているとされるから、<sup>⑨</sup> 同人がこれらの運びに直接どの程度関与していたかは不明と言わざるを得ない。

ともあれ、この新たな契約によってビリオンの仏語教育は継続し、以後丁度三年を経過した一九年七月三〇日をもって閉塾したのであろう。時代は布教の便法としての語学塾をそれ程必要としなかったに違いない。なお、ビリオンは、二二年二月、帝国憲法が「信教ノ自由」を認めた憲法発布日をすぐる二週間、二月二四日に、自ら購入した三条河原町教会の土地を後にして、新赴任地・山口県に去った。今日の河原町教会の前身として現在犬山市に移築されている天主堂の開堂式は翌二三年五月一日に行なわれたのである。

## 第二期以降の主たる動向

**第二期・第三期**は様々の意味で紆余曲折に富んでいる。パリ外国宣教会は第一期に見た定着の上に憲法発布による一応の信仰の自由を得て、明治二三年第一回教会会議を開き、日本全体を長崎・大阪・東京・函館の四教区に分割、効果的布教を企図する。一方、明治二五年、ローマ教皇は東京を大司教区に昇格させ、布教体制を確立させる。殊にこれ迄、主として旧信徒の発見とその信仰育成に重点を置いた方針が、知識階級に対する布教に転換されたことは重

要な変化であつた。この動きは、明治二・三年の国粹主義者による破邪顕正運動に影響されて、信徒数の一時的な伸び悩みを経験させるが、しかし着実に効果を生んだ。たとえば、二八年には日本人司祭が二〇人に達し、二五年以降信徒数は年間千人台で増加、一方、信徒団体としての公友会が明治三四年、公敎敎友会に拡大發展する。この時期に小児洗礼が増加していることは家庭ごとの信徒が育ちつつあつたことを意味し、臨終洗礼の多かつたことはカトリックへの社会的認識のしるしであつたと言えよう。この動きは、フランスが三国干渉に加担して反感を買い、日露戦争においてロシアに好意を示したことによる反仏的傾向を招く迄続く。そして三七年、パリ外国宣敎会の日本布敎の独占は終り、他修道会の来日に道があげられる。

政府の敎育政策上では、この期の森有礼の私立学校育成政策の影響が初期に見られる。

此の期のカトリック系学校設立の動きは、前述の敎団の布敎方針の変化を受け、また一方で、前期の敎育活動の経験を経て、特に中等敎育の重要性を認識したところから、中等敎育の設立運営が試行される。つまり、男子の中等敎育機関としては、前期に見た外国語学校が本来の意図である神学校に立ち返つたあと、暫らくの空白を経て、明治二一年、男子敎育修道会としての「マリア会」が招聘された。同会は二一年、東京に暁星を、大阪に明星を設立する。

暁星は当初仏語敎授の家塾として発足したが、二三年には学制の「外国敎師ニテ敎授スル中学敎則」に従うものとして認められ、寮を付設し、保護者の要望に應えて二三年、中学校としての正式認可を受けたのである。同様、マリア会学校の大阪明星も、初め語学の特種学校として発足しつつ、明治三五年に甲種商業学校として認可された。長崎海星も三六年にその後を追っている。なお、この期には他に、フェーラン神父によって学生寮が開かれ、当初（明治二七年）小倉にあつたそれが三一年東京茗荷谷育英塾に成長している。これは各自の望む中等あるいは高等専門敎育機

関に学生を通わせ乍ら、寮内で語学・文学の個人教授を行ない、人格陶冶を併せ勤めさせようとしたものである。他方、舞鶴教会に信者によって「北辰学会」が設けられ、語学研究が行なわれている。

女子の中等教育に関しては、前稿の各修道会が第一期の塾的形態を脱して次第に学校組織を整えていくこととなる。そして東京以外にも、たとえば「聖パウロ会」が函館（明治十九年）・新潟（二十三年）・盛岡（二十五年）・仙台（二十六年）に、「サンモール会」が横浜（三十二年）・静岡（三十六年）に、「幼きイエズス会」が神戸（二十二年）・岡山（二十二年）・京都（二十五年）・熊本（三十二年）・八代（三十三年）に学校を建てている。ここでこの期に注目されるのは、学校設立に関して信徒が積極的に活動したことである。たとえば、岡山私立玫瑰学校および私立盛岡女学校は、それぞれ幼きイエズス会を、知事（の娘）が、また聖パウロ会を市長が招聘、その地方最初の女子中等教育機関としたものである。この他、吉原教会裁縫塾、舞鶴教会付属北辰学会女子部、神奈川県大岡村裁縫塾が設立され、修道院から修道女達の出張教授を受けるという形で信徒が経営したのである。

これら、この期の学校は、教育法令の整備とともにそれに則したものととして自らも整え、次第に認可学校となっていく。盛岡（二十六年）・東京（三十二年）・函館（同）・新潟（三十二年）の聖パウロ女学校等がそれである。

次いで第三に、この期の学校機関として小学校があげられる。既に触れた通り、前期末に数的に減少していた小学校は、明治十九年、森有礼の「小学校令」によって再び急激に増加し、孤児院付属の小学校も含めて九三校に到り、収容生徒数も四七一八人に達している。たとえば、此の期の設置になるものとして、北野村小学校、小川町小学校、安房前原小学校、名古屋常盤町小学校、仙台小学校、新潟教会付属明道小学校、マリア会明石町小学校および長崎小学校、そして明星小学校、長崎浦上村三成女児尋常小学校、大浦聖心女学校、神戸教会学校、玉造聖若瑟教育院、ト

ラピスト付属野上尋常小学校、山梨県山城村敎会尋常小学校、横浜若葉町敎会学校、京都敎会聖果斯小学校、仏語女学校、岡山雅哥学校、盛岡真愛小学校、幼きイエズス会熊本ボルジア塾、本所敎会付属敬愛小学校等があげられる。

なお、これら及び前期既設私立小学校の中には私立尋常小学校として正式認可を受けるものが増え、一方、高等小學校を持つに至る學校も出てくる。また幼稚園を付設する所も此の時期には増えている。いずれも小規模ではあったが、社会の底辺にある庶民を対象として独特の敎育を行なっていたと見られる。しかし、森文政に続いた敎育諸法令は再びそれらに制限を加えたから、小学校は再び減少し、次期に至っても遂に回復することはない。つまり、この兩期の終りの明治三七年には、中等敎育を含めて僅か三五校となったのである。

この期の特徴は布敎が背景に退いて、敎育そのものが前面に現われたことである。つまり、一〇年代から一般の知育偏重と、二〇年代の国家主義的道德偏重に対して、一方で道德敎育の必要を主張し、他方で生徒の自主的判斷とか、そのための知的堅実さを必要と考え、敎育そのものが重視されたのである。しかも、敎育勅語の頒布や宗教敎育禁止訓令が、宗教そのものを後退させ、上の傾向を強めることとなった。ここでは宗教的敎義は引き下げられ乍ら、尚キリスト敎的人間觀に立つ敎育が考えられた。女子について特に、たとえばフェヌロンの説く女性像の不在が批判された。

他方、別の面からも敎育が前面に出て来る。つまり、學校の存立そのものにかかわる經營の困難さから、私學の敎育的存在価値を問う方策が考慮されたのである。たとえば、マリア会暁星學校は、同じカトリックの「イエズス会」が東京に男子中學校を設立するという風聞に対して、互に牽制する結果になるとし、高等敎育あるいは出版事業を同會に示唆するのである。また、マリア會長崎海星學校は、學校の基本的性格を商業學校にすべきか中學校にすべきか



について検討し、小学生の絶対数や同種中学校等教育機関との競合の問題を考慮して、長期にわたって迷った末、遂に商業学校として性格を決め乍ら、しかも八年後には中学校に転向したのである。

かくして、この期においては、政府の教育政策の統制強化に順応し、それによって内部改革を進め、社会的位置を確保しようとする傾向が見られた。教育勅語も訓令第一二号も、カトリックは一応その儘に受容したのである。ただ、宗教教育の重要性と、私学経営の自由の必要性はたえず繰り返し主張された。<sup>⑤</sup>

第四期は、日露戦争の勝利による我国政府の対欧米接近によって裏付けられている。したがって、キリスト教に対する融和政策が基調として見られ、それを象徴的に示すのがローマ教皇特使に対する我国指導者の朝野を挙げての歓迎であった。それはプロテスタントが示し始めた社会主義的傾向との対比において、特にカトリックに強く示された傾向とも言える。一方、これ迄と異なり、宣教師陣にはスペイン・ドイツ・アメリカ・カナダ・イギリスの司祭が加わることによって、カトリック教会にこれ迄十分無かった多様性が生まれている。信徒数も再び増加を示し、年間二千人台に上り、ケーベル博士の回心や三木露風の回心によるトラピスト修道院の紹介、その他を通して、カトリックが知識階級あるいは上流階級に歓迎されるものとなる。また、「教学研鑽和仏学会」が知識階級を対象として、その名の意味する目的で設けられる。

ただ、政府の教育政策は先に出された訓令一二号の緩和があつた以外、既定の枠をこえてはゆるめられなかった。かくして、第四期の主たる傾向としては、第二期・第三期に設立された学校機関による法的地位の獲得がある。つまり、文部省による正式認可の獲得と、男子の場合は更に「認定」を受けることが目指された。既設の機関が、たと

えば女学校の場合、高等女学校や家政女学校として、次第にそれらの地位を獲得するとともに、一応の安定を迎える。しかしそれは他面では、国家教育政策への画一化という代償の中で行なわれたものであり、私学の特殊性は減じていく。

一方、小学校は、教会立学校が消滅の一步を辿り、僅かに仙台の遠刈田開拓地に七日原植民地小学校ができたにとどまる。そして、修道会運営になる小学校のみが残るという事態になっていく。

中学校に関しては、新たに來日した「神言会」によって、英独仏語を教える秋田外国語学会が、また同じく新來の「フランチスコ会」による札幌語學塾（英独仏）、北海道亀田独仏塾が設立され、更にマリア会によって夜間で英仏語を教える熊本外国語智山中学校が設立されるが、すべて短命に終っている。ただ、既に確固たる地歩を占めていたマリア会だけは規模を拡大し、たとえば、その校舍新築には、時の首相・西園寺公望を筆頭發起人に戴くなどして発展している。

女子教育については、幼きイエズス会による大阪信愛女学校の中等段階への昇格、新來日の「聖靈会」による女子職業学校付設の秋田家政塾（四一年）、そして、日本人修道会「訪問童貞会」の宮津裁縫伝習所（三九年）が設立され、それぞれ今日の女子高等学校に続いている。それは、男子私立校との比較において、我国での女子私立学校維持の比較的容易さを物語っているものとも言える。つまり、それは、男子教育における官公立優位主義を示すものであり、女子と私立への偏見を示すものであった。

これらの一つの飽和的停滞傾向の中で特に注目すべき動向は、第二・第三期の中等教育機関の整備を踏まえ、男子・女子ともに高等教育の必要性が認識されるに到ったことである。これは既に述べたローマ敎皇特使來日中、カト

リック教会外の朝野においても共に要望されたもので、中でも三宅雪嶺の新聞社説が有名である。これらを受けて、やがて、設立準備のため「イエズス会」及び「聖心会」が来日し、前者は明治四五年、専門学校令による文科・商科の上智大学を設立、別に独語・英語の夜学研究科を付設し、後者は、将来専門学校を付置する予定で、四一年に東京聖心女子学院を、四四年に神戸聖心女子学院を創設した。

このようにして、この期は、キリスト教主義教育という内容面から言えば、雌伏期とも言うべきものであるが、学校の設立運営上では確立期と言って良いであろう。これ以後で、カトリック系学校が目ざましく増加するのは第二次世界大戦以後からである。

## む す び

以上に見たカトリック系学校設立の動きには、明らかにプロテスタント系のそれと幾つかの差異があり、それらが特徴をなしている。箇条的に取り上げれば、

- 一、中等・高等段階の男女学校の設立が年次的に数段遅れ、数も少ないこと。
- 二、孤児院を含む小学校の設立が多く、辺鄙な地方にまで及んでいたこと。
- 三、多くが個人立ではなく修道会立であったこと。そして、学校設立が本来の予定の事業として行なわれたこと。
- 四、教育内容上では、職業学校や家事のような実生活向きの教育が多くなされたこと。
- 五、寮を付設し、全人教育を配慮する学校が多かったこと。
- 六、教育方針として、我国に適した形で教育を行なおうとする態勢が強かったこと、たとえば双葉学園の教育方針は

「日本婦人をつくる」ことであった。

七、政治や現実の社会の変動から一歩離れた所で教育を行おうとしていたこと。

八、したがって、政府の教育政策に同調の傾向を持つように見えること。事實は必ずしもそうではなかったが――。

最後に、教育史上におけるカトリック系学校の問題点を簡単に取り上げておこう。

一、本質的には教育勅語や所謂良妻賢母主義に批判的であり乍ら、積極的にそれを学校教育の中で打ち出したとは言えなかったこと。

二、教育を個人の人格形成の問題としてつかんだが、それを更に歴史的社會への示唆ないしは方向づけとして与える姿勢が弱かったこと。

三、教育内容・方法面で必ずしも我国学校教育に示唆するものを持たなかったこと。但し、モンテッソーリ教育が明治四五年に受容されている。<sup>③</sup>

(未完)<sup>④</sup>

# 註

① 別記の通り、明治一九年以降を意味し、本論第Ⅳ章以下の要約である。

② 聖母女学院短期大学「研究紀要」第三輯

③ 資料入手に関しては、四七年度の仏教大学学会特別助成金に励まされる所が大きかった。ここに謝意を表したい。

④ 後日、これらのうち教育研究資料となる出版物の資料リストを作成するつもりである。なお、隠れた出版物に関して関係者か

ら連絡を頂ければ幸甚に思う。

- ⑤ 因みに、本稿執筆中の現在、次の二つの事が行なわれている。(一)「東西靈性交流」のため来日したカトリック修道士一五人の参禅(例、花園大学など)。(二)カトリック教会によるマルチン・ルッターの再評価(『カトリック新聞』昭和五八年一〇月二日号、百瀬文晃神父論文)。

- ⑥ 現在、大阪府立大学文学部助教

- ⑦ この中では、仏教界の教育世論を加えていない。これは今後の研究課題である。

- ⑧ 日本教育科学研究所編、有信堂。特に、武田勘治、片山清一の論文。

- ⑨ 日独書院発行。

- ⑩ 基督教学校教育問題発行。

- ⑪ 創文社発行。

- ⑫ 明治図書、一九六三年。

- ⑬ 第四卷、上智大学編、富山房、昭和二十九年。

- ⑭ ちなみに、英文に限って、多少歴史に触れた著作を挙げておこう。和文に関しては註④参照。

Paul Taguchi; The Catholic Church in Japan Mainichi Shinbun Kyoto 1946. (全39頁)

Thomas Uytenbroeck; The Franciscans in the Land of the Rising Sun, fifty years after their return 1957 Tokyo

St. Joseph Friary (全82頁)

Joseph Jennes; A History of the Catholic Church in Japan, From its Beginnings to the Early Meiji Period (1549~

1873) A Short Handbook (Missionary Bulletin Series #8) The Committee of the Apostolate Tokyo 1959. (全251頁)

Joseph J. Spae; Catholicism in Japan — A Sociological Study— The International Institute for the Study of Religions

I. S. R. Press Tokyo 1964. (全107頁)

- ⑮ 日本基督教団出版局発行。

- ⑯ 前記仏文原著の英訳である。

- ⑰ 狩谷平司『ベリヨーン神父の生涯』一六七頁、昭和一三年、非売品、稲畑香料店発行。

⑮ 池田敏雄『ビリオン神父』二九二頁、昭和四〇年、中央出版社。

⑯ 池田敏雄『人物による日本カトリック教会史』一三二頁、一三二頁、昭和四三年、中央出版社。

⑰ この点に關して、三人のビリオン伝記の筆者が異なつた見解を示している。註⑬および山崎忠雄『偉大なるビリオン神父』。

⑱ 『京都市教育研究所報告 一五一、明治期における京都教育資料分類目録——故徳重浅吉氏所蔵資料による——（一九六八）』

（以下「徳重文書」と呼ぶ）。

⑲ 当時、京都大学文学部助教。

⑳ 京都府教育会発行、昭和一五年。

㉑ これら府庁文書の原文は現在所在不明となっている。

㉒ 第四節 愛良学舎 五四六頁—五四九頁。

㉓ 府庁文書『愛良学舎視察之記』『外国人傭入一件』など。

㉔ 『河原町カトリック教会 宣教百年の歩み』一五頁他（宣教百年史編集委員会、昭和五七年）、なお、この他、前記ビリオン伝記など。

㉕ 「幼きイエズス修道会」明治一〇年七月来日。

㉖ 註⑬の伝記によると、神戸では度々、各地に流刑中のきりしたんと接触したという。

㉗ ちなみに、註⑬の伝記によれば、入洛後間もなく、智恩院において「院長岸上師」の教えを受けると共に「時の管長鶴飼鉄上に面接」したという。また、仏僧と親しみ、儀式や茶会に度々招かれ、謝礼にフランスからの時計や望遠鏡を贈ったという。なお、後述するように、ビリオンは『日本仏教史』を仏文で著した。

㉘ ヨハネ・スクルース『明治時代の播磨国とカトリック教会』（淳心会発行、昭和五二年）によれば、明治九年に二三名、一〇年に九四名、一年に二百名となっている（六六頁）。

㉙ 前記の伝記によれば、那須順市や古林某の名前が見える。特に後者はその息子を京都の愛良学舎に学ばせたことが徳重文書で明らかである。

㉚ この「外国教師雇入願」の文面からすると、他に開塾願文書も有ったかと思われるが現在では不明である。

㉛ 前述した問題の誤記である。

⑤⑥ 前註①⑦ 六二頁。

⑤⑦ 洋々社発行 四八〇頁。

⑤⑧ 前註②⑦ 二〇頁。但し、同一七頁の図では高倉通りの東側になっているが、実際は本稿一四九頁に見る通り西側の筈である。

⑤⑨ 『京都府百年の年表 五、教育篇』。

⑤⑩ 正しくは古林、なお昌信を正信と記した場合もある。

⑤⑪ ジュリーについては前稿で触れた。

⑤⑫ 第一八回「視察之記」（明治一四年五月）。

⑤⑬ 徳重文書に記録されている最後の視察之記「愛良学舎之部」（明治一四年十一月）。

⑤⑭ ビリオンは一三年の夏休み中、仏教研究のため聖（西？）光寺近くの五条に居を移してさえている。

⑤⑮ 洗礼名簿における氏名。林昌信が古林正信となっている。

⑤⑯ 他に亀三、亀造の表記もある。

⑤⑰ 前註②⑦ 一九頁。

⑤⑱ 前註②⑦ 一七頁。

⑤⑲ 前註①⑧ 二二三頁。

⑤⑳ 前註①⑦ 九〇頁。

⑤㉑ 前註③① 一五九頁。

⑤㉒ 前述（はじめに）、『明治教育世論の研究』上巻の拙稿。

⑤㉓ 本山幸彦編『帝国議會と教育政策』（思文閣出版、昭和五六年）中の拙稿「私学論議の展開」。

⑤㉔ 本山幸彦編『大正の教育』（第一法規、昭和五三年）中の拙稿「モンテッソーリ法への『第一期』対応——受容と挫折の一サ  
イクル——」。

⑤㉕ 一四九頁以降の判断資料および出典等については後日を期する。

